

アスペクト体験と内的像

ウィトゲンシュタイン『哲学探究』第II部 xi 読解

菅崎 香乃

序言

きみ自身の内側でその体験を分析しようとしてはならない。(PI II188, LW548)

この謹戒は、端からそうしようとしていないものには、効力がない。この一文が真に機能するのは、まさに今、そうしようとしているものに対してだけである。アスペクトに気づくという体験を考えはじめると、わたし自身の内側をのぞきこもうとする地点にいつの間にか立ってしまう。それが、この一文にうでをつかまれるように、引き戻される。ウィトゲンシュタインが話しかけている「きみ」とは、そういうわたしに他ならないように思われる。では、この謹戒が発せられるのはどこのか。本稿では、この問いに答えることから始めたい。それによって、多様なモチーフを内包し、複雑に錯綜するアスペクトについての議論が、なにを対象としているのか、少なくともそのひとつに光をあてることができると考える。

1 アスペクト体験とはなにか

1.1 2つの「見る」

アスペクトに関する議論は『探究』第II部xiで展開されるが、そこで挙げられる事例は、ウサギ・アヒルの頭に代表される錯視や三角形を山や矢印として見ること、箱を家に見立てる子どもの遊び、鏡像や立体視、さらには、表情に感情を見てとる場合など、かなり多岐にわたる。そのうち、最初に「アスペクトに気づくこと」¹として導入されるのは、2人の顔の間に類似性を見るという事例である。

ひとつの顔を観察し、突然、別の顔との類似性にわたしは気づく。その顔が変化しなかったことをわたしは見ているが、また、それを別様にも見ているのだ。この経験を、わたしは「アスペクトに気づくこと」と呼ぶ。(PI II113)

対象が変化していないことを見ながら、同時にそれを以前とは別様に見るという特徴は、『探究』第II部xiで挙げられる大方の事例に共通している。たとえば、今までウサギに見えていた絵がアヒルにも見えることに、はっと気がつく。しかし、絵それ自体が変化していないこともわたしは同時に見ている。それが、ウサギ・アヒルの頭がアスペクト転換するときの体験である。共通の表現という観点から『最後の草稿』では、以下のように特徴づけられている。

アスペクト体験 (Aspekterlebnis) に共通する表現のかたち。「これをわたしは今それとして見る」、「それをわたしは今そのように見る」または「これは今はそれであり、今はそれだ」もしくは「それをわたしは今…として聞く、それを以前は…として聞いた」(LW697, cf. LW588) ²。

これらの要点を理解するためには、比較される表現を考える必要がある。それには「見る (sehen)」の2つの用法に注目するのが有益である。

「見る」という語の2つの使用。

ひとつは、「そこにきみはなにを見ているのか」—「わたしが見ているのはこれだ」(記述、スケッチ、コピーがつづく)。もうひとつは、「これら2つの顔にわたしは類似性を見る」。報告する相手が、その顔をわたし自身と同じようにはっきりと見えていてもかまわない。(PI II111)

後者は、すでに述べたとおり、アスペクトに気づく、典型事例のひとつである。それに対して、前者は「知覚を記述する」(PI II121)、「知覚を報告する」(PI II128)。

では、この2つの「見る」の関係はいかなるものか。以下では、知覚 (Wahrnehmung) と体験 (Erlebnis)、経験 (Erfahrung)³との関係に着目しながら、この点を考察したい。

1.2 知覚と体験

知覚と体験、経験との関係は、『最後の草稿』で詳しく展開されている。

立方体の図にさまざまなアスペクトがあることを知っていれば、ほかのひとがなにを見ているかを体験するために、わたしは、そのコピーの他に、見られたもののモデルをそのひとに作らせたり、示させたりする。⁴ (PI II135, cf. LW501)

立方体の図は、箱とも、角で合わさっている3枚の板とも、あるいは1枚の正方形と2枚の平行四辺形からなる平面図形とも見ることができる⁵。これらのアスペクトのうちどれをかれが見ているかを知るためには、この図をただ正確にコピーさせるだけでは不十分で、かれにはさらに尋ねなければならない。よりわかりやすい事例は『最後の草稿』§ 633 の図だろう。これは、凸面にも凹面にも見え、相手がそのどちらを見ているのかは、この図をコピーさせるだけではわからない。それを知るためには、かれに1枚の紙片を渡して折ってもらい、すなわちそのモデルをつくらせるのが一番簡単な方法である。では、コピーとモデルという「2つの説明」(PI II135) のちがいはなにか。

コピーのほかにさらに、モデルを示すということは、視覚体験 (Seherlebnis) に属しているかもしれない。[しかし、] 視覚的な知覚 (visuelle Wahrnehmung) には属していない。⁶ (LW500)

2つの見るのうち前者は、記述やコピーで示されるとされていた。しかし、上のよ

うなケースでは、どのアスペクトが見られているのか、色や形のコピーだけからはわからない。それをわたしが体験するためには、モデルを示させることが必要で、それは「知覚」には属さず、「視覚体験」に属すという考えが述べられている。この点は、さらに率直にこう言われることもある。

「今わたしはそれを…として見る」という報告は、しかし、どんな知覚も報告していない。(LW486)

[アスペクトに] 気づくこと⁷は、ある視覚体験である。(LW511)

これらから、2つの見るのうち前者は知覚であり、後者、すなわちアスペクトに気づくことは、知覚ではない体験だと、あるいはコピーに加えてさらにモデルが求められるのと類比的に、知覚+体験=アスペクトに気づくことだと言いたくなるが⁸、そう単純ではない。アスペクトに気づき、それを表明することは「新しい知覚」の表現でもあるのだ。

アスペクトの変化。「きみはたしかにこう言うだろう、その像が今やまったく変わってしまった！」

しかし、なにが別様なのか。わたしの印象か。わたしの態度か。わたしはそれを言うことができるのか。わたしはその変化を、知覚のように、その対象がわたしの目の前で変わってしまったかのように記述する。(PI II129, LW475, 476) アスペクト変化の表現はある新しい知覚の表現であると同時に、変化していない知覚の表現を伴っている。(PI II130, LW494)

コピーは知覚を完全に記述している。それに加えて示すモデルはわたしのある種の見方である。視覚体験と言うこともできるかもしれない。知覚の報告として、その場合コピーはより正確である。しかし、アスペクトがひらめいたなら、それについての表現（たとえば、モデルを示すこと）は、本質的に、ある新しい知覚の表現である。(LW495)

そうすると、新しいコピーが今やこの表現に対応しなければならないかのよう

である。が、そうではない。(LW496)

この一連の節からわかるのは、アスペクト体験における知覚とコピー、そして視覚体験とモデルのねじれた関係である。アスペクトに気づくことは、同じひとつの対象を別様に見ることである。それは、上でも言われているとおり、あたかも対象が変化するのを知覚したのだと表現したくなるような体験である。しかし、その変化した知覚、新しい知覚を表現する新しいコピーを示したくても、対象の色や形そのままのコピーでは「変化が示されない」(PI II131, LW439)。コピーが精確であればあるほど、その体験はかえって表現され得ないのである。そのとき、「以前コピーの後では、場合によっては不要な規定と思われたものが、唯一可能な体験の表現になってしまう」(PI II135, cf. LW502)。2つの顔の類似性を見るという事例でこれを確認しよう。

何年も見ていないひとに出くわす。わたしはそのひとをはっきりと見ているのだが、認識してはいない。突然、かれを認識して、その変化した顔の中に以前の顔を見る。絵が描けたら、今やかれの肖像画をわたしは別様に描くと思う。(PI II143, cf. LW544)

ある人物に旧友の顔との類似性を見てとる、すなわちアスペクトに気づく。その前後で、わたしが描くかれの肖像画、スケッチは変化する⁹。つまり、「ある新しい種類の記述を与える」(PI II153, LW507)、「自分の見ているものを別様に記述する」(PI II172, LW611)ということだ。したがって、対象のコピーや記述にモデルを付け加えることではなく、対象の記述それ自体が変化することによって、アスペクトの変化は示される。この事実が、アスペクトに気づくことを、「見る」と同時に「見る」ではないような独特の体験にしているのだと言える。

「…として見る」というのは知覚¹⁰に属さない。それゆえそれは見ることのようにでもあり、また見ることではないようにでもある。(PI II137)

1.3 謹戒が発せられる地点

しかし、そのときわたしはなにをしているのだろうか。目の前の図は以前と変わらないにもかかわらず、それでもなにかが変化し、あるいは見られているとすれば、それはいったいなにか。この問いに、つぎのように答えたくならないだろうか。

「わたしがほんとうに見ているものは、やはり、対象の作用によってわたしの内側にできあがるものでなくてはならない。」—そのときわたしの内側にできあがるものは、ある種の写像であり、自身がふたたび眺め、目の前に置くことのできるようなもの、ほとんど物質化したようなものである。

そして、この物質化したものは、なにか空間的なものであって、空間的な概念によって記述できなくてはならない。(PI II158, BPP I1075)

ここにたって、最初に引用した一文、すなわち「きみ自身の内側でその体験を分析しようとしてはならない」、これを検討する地点に立つことができた。

アスペクト体験を考察しようとするとき、自分自身の内側をついのぞこうとしてしまう。なぜなら、アスペクトの変化が起こるとき、わたしはたしかに対象を、しかもそれがなにも変化していないことを見ている。それでも、なにかが変化し、なおかつそれをわたしは見ているのだとすれば、それは自分の内側にできあがった、なにか新しいコピーにあたるもの、対象をわたしがこころのなかに写しとった像のようなものはずだ。そう考えたくなる。そうして、自分の内側にできあがった写像や「内的像」(PI II133, LW442)、「私的な対象」(PI II214) という考えに導かれてしまうのである¹¹。

しかし、あの一文は「してはならない」という禁止である。そうしたくなってしまっても、そうしてはならないと言っている。では、この謹戒にしたがうなら、どうすればよいのか。ウィトゲンシュタインの答えは、「概念の問題」として問いを立てることである。すなわち、「経験 [を表現する] 諸概念のうちで、その概念が占

める位置」(PI II115, LW435)を問うことである。以下では、その問いを「アスペクトに気づくことは、どのていど見ることなのか」¹²というかたちで立てる可能性を探ってみたい。

2 アスペクトに気づくことは、どのていど見ることなのか

2.1 問いの位置づけ

「それはやはり見ることではない！」—「それはやはり見ることだ！」—この両方が概念的に正当化されなければならない。(LW637, PI II181)

問題は、それはどのていど見ることなのかだ。(LW638, cf.PI II182)

まず、この「見ること」が指しているのは、2つの見るの前者、すなわち、コピーで表すことのできる知覚の「見る」と考えればよい。つぎに、「どのていど」が意味するところは、アスペクト体験と以下に挙げる動詞群との比較を通じて、それと「見る」との距離を測るということである。すなわち、「理解する (verstehen)」「知る (wissen)」「考える (denken)」や「解釈する (deuten)」「読む (lesen)」あるいは「想像する (vorstellen)」といったさまざまな動詞である。

このように、この問い¹³はかなり広範な領域に対して立てられるべきだが、本稿ではそのごく一部、「感じる (fühlen)」「感じとる (empfinden)」「意識する (bewußt werden)」といった動詞を取りあげたい。というのも、これらとの比較は、アスペクト体験を考へるときに、わたし自身の内側をのぞきこもうとしてしまう、その要因の一端を明かすと同時に、アスペクト体験の対象がなにか空間的な像に準ずるものだという考えを斥ける手がかりをも与えてくれるからである。そのために、まず、アスペクト体験の表現を検討する。立てられた問いが概念についてである以上、特徴的な表現や言い回しを確認することは、妥当な入り口だと言えるだろう。

2.2 アスペクト体験の表現がもつ特徴

すでに引用したいいくつかのアスペクト体験を表す表現のうち「これをわたしは今それとして見る (Ich sehe es jetzt als das.)」を、もっとも代表的なものとして挙げるができる。注目すべきは「として (als)」という言い回しである。これは、ひとつの対象に複数の異なったアスペクトがあることを暗示し、それが変化するというこの体験の中核を表している。そして、このことからさらに2つの特徴を取り出すことができる。ひとつは「今 (jetzt)」と言われている点である。別様に見る可能性があるということは、あるものとして見ている時間とそれとは別のものとして見ている時間があり得るということ、つまり、時間を限定する表現が必要になるということである。そして、もうひとつの特徴は、人称である。アスペクト体験を特徴づける表現に「それは今わたしにとって…である (Das ist jetzt für mich…)」(PI II122, 124) が挙げられることもあるが、注目すべきは「わたしにとって (für mich)」という言い回しである。2つの見るのどちらにも人称は主語として含まれるが、これによって人称の必要性が強調されている。これが示しているのは、複数のアスペクトのうちのどれを見ているのか、ひとによって異なる可能性があるということだ。

以上から、アスペクト体験の表現に含まれる時間と人称の表現がコピーで表すことのできる「見る」とのちがいだと言うことができる。これらが興味深いのは、「感じる」「感じとる」「意識する」といった概念のもつ特徴に重なるからである¹⁴。

2.21 持続

まず、時間について、どのくらいのあいだ持続していたのかを問題にするような事例を2つ挙げて考えたい。

わたしはこう言うことができるかもしれない。ある画像は、わたしがそれを見ている間、わたしにとってずっと生きているわけではない。

「彼女の画像は、壁からわたしに微笑みかけている。」わたしのまなざしがまさにそれに向けられているとしても、つねにそうするわけではない。(PI II200)

[2人の顔の] 類似性がわたしを驚かせるが、その驚きは消えてしまう。

ほんの短い時間それはわたしを驚かせたのだが、もう驚いてはいない。(PI II244, LW714)

そのとき、なにが起こったのか。まず、その顔をいぶかしげな表情でわたしはながめる。「なぜきみはそんなに興味津々にかれに見入っているんだい」とだれかに聞かれたら、「だって、かれがお父さんにあんなにも似ているから」と答えるだろう。もしかするとそのひとが話しかけてくるかもしれないが、この類似性のことばかり考えていて、わたしはかれの話に注意を向けない。(LW715)

これらはやや極端なケースかもしれないが、アスペクトが変化し、ひらめきが起こるとき、似たようなことを少なからず体験するだろう。判じ絵を解こうと、それを一心に見つめているとか、ウサギ-アヒルの頭の錯視をすでに何度も体験していても、それを起こそうとするときには、少なからず目を見開いて集中する。そして、それは数秒か数分間といったところである。

ここ¹⁵⁾にひらめいているものは、観察対象に対する一定の没頭が持続している間だけ存続すると、わたしは言いたい。(中略) 自問しろ。「どのくらいの間、なにかに注目しているのか」—どのくらいの間、それは目新しいのか。(PI II237, LW692)

アスペクトをひらめいているあいだの持続が興味深いのは、これが「感じる」といった概念と類縁性を示すからである。「どんな感覚にも持続があり、はじめとおわりを指定できる可能性」(BPP II63)があるとウィトゲンシュタインは指摘する。たとえば、痛みの場合、「今朝から昼まで、頭痛を感じていた」といったように、それが持続していた時間を限定し、はじまりとおわりを示すことは可能である。

これに対して、前者の見るの場合、このような時間の持続を表現する語句はそぐわない。

つぎのように問うてみたい。「ある対象(たとえば、この戸棚)を見ているあい

だ、わたしは、その空間性 [それが3次元であること]、奥行きをつねに意識しているのか。」それを、いわば、すべての時間ずっと、感じているのか。—しかし、この質問を三人称でしてみる。(中略) —「間断なく痛みを感じる」ということがなにを意味するのか、かれは知っている。しかし、このことはここではかれを混乱させるだけだろう (わたしも混乱させるように)。

かれが今、自分はその奥行きを絶えず意識していると言えば、—わたしはかれを信じるのか。また、ときどき (たとえば、それについて語る時) しか意識しないとせば、—わたしはそれを信じるのか。これらの答えは誤った基盤のうへにあるようにわたしには思える。しかし、対象がかれにはときに平面的に、ときに立体的に見えると言うなら、別である。(PI II241)

事情がちがうと言われている最後のケースは、アスペクトが変化する場合である。その場合には、すでに確認したように、時間の持続を表現する言い回しが可能であり、上の引用中でも触れられているように、それは「感じる」や「意識する」といった語句の特徴でもある。しかし、この持続の表現を、前者の見るにまで拡張して使ってみると、途端に違和感を覚えるようになる。アスペクトに気づくときに「数分」や「一瞬」と言うことのできるからと言って、その時間を単純に延ばすことで、戸棚や葉を見るときにも、「常に」その空間性を見ているとか、「見ているあいだずっと」その葉をみどりとして見ている (cf. LW639) という言い回しはできない。なぜなら、戸棚を見るということは、3次元的に見るということであり、葉を見ているときには、みどりの葉を見ているのである。それ以外の可能性はそもそもなく、その戸棚と奥行き、その葉とみどりを切り離して見ることはできない¹⁶。それゆえ、時間の持続を表現する語句と一緒に使うことができないのである。このことは2つの「見る」がもつ文法、概念としてのちがいを示している。

2.12 人称

つぎに人称について考えてみたい。「感じる」などの動詞には人称間の非対称性がある。たとえば、「痛みを感じる」が「かれ」によって発せられた場合、本当に痛い

のか、どのくらい痛いのかといったことは、かれのからだの状態やふるまい、たとえば、ひじに擦り傷があるとか、うめいているとか、あるいは「そんなに痛くない」といった言明を観察することで確かめられる。それに対して、それを「わたし」が発する場合には、痛いかどうかを自分のふるまいや言明の観察を通じて確認したりしない。そのようなことはするまでもなく、痛いのである。つまり、「三人称現在は観察によって確認されるが、一人称はそうではない」(RPP II63, cf. RPP I836)。これが心理学的動詞、体験動詞の特徴だとウィトゲンシュタインは述べている。

この人称の特徴は、2つの見る両方に当てはまる。かれがなにを見ているのかは、かれに質問し、その答えを聞くことで確認される。それに対して、わたしの場合、そのような確認はするまでもない。その意味で「見る」は、一般に心理学的動詞に属していると言える。しかし、前者の見るはコピーによって示されるのであり、そのコピーや対象そのものが共有されれば、あるいは相手が「わたしが見ているのはウサギだ」といった報告をすれば、なにを見ているのかがそれ以上問題になることはまずない。知覚の報告が求められるケースとしては、相手の視線が届かない、たとえば遠くにあったり、隠れている対象について報告することが、基本的には念頭に置かれている (cf. LW180, 431)。そのため、人称が使われるのは、自分には見えるが相手には見えないという、たとえば立っている位置のちがいや双眼鏡をもっているか否かといった要因による。それに対して、アスペクト体験では、同じ対象を見ていても「わたし」と「かれ」は異なる報告をする可能性があり、その差はコピーでは示されない。そのために、2つの見るが導入されたときにも、後者には、「報告する相手が、その顔をわたし自身と同じようにはっきりと見えてもかまわない」とあえて付言されている。対象が共有されてもなお、相手とわたしは異なるアスペクトを見ている可能性があるからだ。そのため、人称に言及することが、なお意味をもつ¹⁷。

ウィトゲンシュタイン自身は人称に視点を置いているわけではないが、その特徴は対象に対する「感じ、感覚」の事例で考えることができる。たとえば、同じ絵を見ても、あるひとは「寂しげだ」と、別のひとは「すがすがしい」と感じとるかもしれない。「水曜日はふとっているが、火曜日はやせている」とウィトゲンシュタイ

ンは言うが、逆に感じるひともいるだろう (cf. PI II274) 18。あるいはどちらもびんとこないかもしれない。また、「画家の目」「音楽家の耳」(LW764) と比喩的に述べられる美的な感覚もこの範疇である 19。

「この顔の悲しみをきみは感じとらねばならない」(ある像をながめる際に) — それを感じとるひとは、しばしばその顔を自分自身でまねする。かれは感銘を受けているのだ。その像は、かれのなかにこの効果を引き起こす。一番に、この「感じ」を痛みの感覚に比較できるだろう。痛みの感覚は、顔の表情や身振りに特徴的な表現がある。

そしてやはり、それは見るとも類縁性がある。なぜならそれは(?) — (LW746)

この節でポイントが置かれているのは、悲しみの感じを引き起こす絵に対するある種の特徴的な反応であるが、ここで注目したいのは、像から受ける「感じ」が痛みの感覚と比較できると同時に、見るとも近いと言われていることである。この「なぜなら」以下を、ウィトゲンシュタインがつづけていないのは非常に残念だが、ここでは、アスペクト体験と「感じとる」との近さを確認することで、ひとまず満足したい。

3 アスペクト体験の表現と内的像

以上のように、アスペクト体験の表現は、コピーによって示される「見る」のもたない特徴を具えている。それは「感じる」「感じとる」や「意識する」といった表現の特徴に重なる。

そして、このことは、アスペクト体験を考えるときに、わたし自身のなかをついのぞきこんでしまいたくなる要因のひとつではないだろうか。

「それは真正の体験なのか。」問題は、どのていどそうなのかということだ。(PI II190, LW663)

ここで難しいのは、概念規定が問題になっているのを見てとることである。
概念は執拗に迫ってくる。(これをきみは忘れてはならない。)(PI II191,
LW591)

アスペクト体験を考えはじめると、自分の内側でなにが起こっているのか、こころのなかになにが真に存在するのかを、どうにかして見極めようと努力してしまう。それは、こころのなかに不可思議ななにかが存在するからではなく、アスペクト体験を表明する、その表現のかたちが対象の報告よりもこころについての表明に近いからではなかろうか。この近縁性が、自分の内側の分析を迫るのだ。こころの表明だからと言って、自分の内側の分析をウィトゲンシュタインが許すわけではもちろんないが、私的な内的過程を求めてしまうのと似た誘惑がここでも働くのである。しかし、ここで問題なのは、不可思議な内的過程ではなく、不明瞭で誤解を生みやすい概念の方だとウィトゲンシュタインは言う。だからこそ、「きみ自身の内側で、その体験を分析しようとしてはならない」。執拗に迫る概念の方を、われわれは向かなければならないのである。

一方で、この概念的特性に着目することで、アスペクトがひらめくときに、ある種の像を見ているのだという考えを斥けることもできる。対象を一瞬で捉えるような視覚体験²⁰を考えてみよう。このような体験に際しては、「見られたものの報告でもあるその表現は、今や認識の叫びでもある」(PI II145, LW571)。

わたしがいる動物をながめていると、「なにを見ているのか」とひとが尋ねる。わたしは「ウサギ」と答える。—わたしが景色を見ていると、一羽のウサギが突然走り去る。わたしは「ウサギ！」と叫ぶ。

この報告と叫びの両方は、知覚の表現と視覚体験の表現である。しかし、この叫びがそうであるのは、報告とはちがった意味においてである。それは、われわれからもれだすのである。その視覚体験との関係は、泣き叫ぶ声と痛みとの関係に似ている。(PI II138, cf. LW549)

知覚を報告するときには、対象がなにであるか、その色や形を空間的な概念を用いて述べる。しかし、視覚体験の表明は、それと類比的にこころのなかにできあがったウサギの像を報告しているわけではない。「ウサギ！」という叫びは、腕をどこかにぶつけたときに「痛い！」と思わず声をあげることに似て、驚きや恐れ of 表明であり、それはむしろ「びっくりした！」や「うわ！」という叫び、あるいはうしろに飛び退ることに近いとウィトゲンシュタインは分析する。つまり、知覚の報告と視覚体験の表明は、同じ表現のかたち、たとえば「ウサギ」といった対象の名前や「見る」という動詞をもっていても、その内実はかなり異なるということだ。

しかし、だからと言って、アスペクトに気づくことが、「感じる」や「意識する」と同じになってしまうわけでは、もちろんない。写真のなかの人物に「今彼女が微笑んでいるように見えた」ということは、たしかに彼女の笑顔に夢中になっていることの表明だと言えるかもしれない。しかし、ウサギ・アヒルの頭が反転するケースではどうだろう。たしかに、それに初めて気づいたときには、「今ウサギだ！」と言って、驚きや喜びを表明するかもしれない。しかし、この表明は「すごい！」といった叫びで完全に置き換えられるわけでもないだろう。そのときわたしは「ウサギを見ている」とやはり言いたくなるし、実際にそう言う (cf. RPP II370)。これに答えるためには、ウィトゲンシュタインが書かなかった「なぜならそれは (?) —」以下を、つづけなければならない²¹。

さらに、「感じる」や「意識する」との相違点も述べておくべきだ。ウィトゲンシュタインは、「三角形において、今はこれを頂点これを底辺として—今はこれを頂点これを底辺として見る」(PI II222) というケースを挙げて、これが可能であるためには、図形の応用をよどみなくできることが必要だとしている。すなわち、「こうした体験の根底には、ある技術の習熟がある」(PI II222) ということだ。そして、この点は「感じる」とのちがいでもある。

このこと [技術の習熟] が、しかじかのことを体験していることの論理的条件でなくてはならないというのは、なんて奇妙なことだろう！たしかに、しかじかのことをできるひとだけが「歯痛を感じる」とは言わない。—このことから、

われわれがここで同じ体験概念を扱っていることなどあり得ないということが帰結する。それは、関連があるにせよ、別の概念なのだ。(PI II222)

このように、技術の習熟や熟知性²²という側面から見ると、アスペクトを見ることは、「感じる」「意識する」とは異なっている。

したがって、アスペクトに気づくことと「感じる」「意識する」とのあいだに近縁性があることはたしかだが、これで問題が片付くわけでもないと言わねばならない。それらを明らかにするためには、すでに述べたように、より多くの動詞との関係へと考察を広げるべきである。

結語

以上、「きみ自身の内側でその体験を分析しようとしてはならない」という謹戒を軸に、これがなぜ発せられたのか、またどう従うのかという問題を考察してきた。前者には、アスペクトに気づくことの知覚と経験、体験とのねじれた関係を指摘し、後者には、アスペクト体験の表現のかたち、とくにその「感じる」等との類縁性を示すことでひとつの例を与えたつもりである。その目的は、ひとえにアスペクト体験を考察するときに現れる「概念的な不明確さを切り抜ける」(cf. PI II202, LW686)こと、そのためにウィトゲンシュタインが示した方法を探ることであった。

ただ、すでに述べたように、アスペクト体験について十全に理解するためには、より多くの動詞、多様な事例について考察すべきである。本稿が対象にできたのは、ウィトゲンシュタインが展開している思考のごく一部にすぎず、むしろ、どれだけこの問題が複雑に入り組んでいるのかを確認しただけに終わった感もある。しかし、そこにある「たくさんの結び目をほどくこと」(LW756)、その端緒に立つことはできたと信じる。

凡例

(1) ウィトゲンシュタインのテキストからの引用は、以下の略号を用い、節番号(『探究』第II部については、Blackwell版4th ed.に従った)を示した。なお、4th ed.で、第II部は“Philosophy of Psychology - A Fragment”とされているが、本稿では、慣例に従って『探究』第II部、およびPI IIで通した。訳については、『探究』、『心理学の哲学』は全集を参照したが、文脈に応じて変更した。『最後の草稿』は拙訳である。

RPP I 『心理学の哲学1』: *Remarks on the Philosophy of Psychology, Vol. I*, Basil Blackwell, 1980. (佐藤徹郎 訳『心理学の哲学1』, ウィトゲンシュタイン全集 補巻1, 大修館書店, 1985.)

RPP II 『心理学の哲学2』: *Remarks on the Philosophy of Psychology, Vol. II*, Basil Blackwell, 1980. (野家啓一 訳『心理学の哲学2』, ウィトゲンシュタイン全集 補巻2, 大修館書店, 1988.)

LW 『最後の草稿』: *Last Writing on the Philosophy of Psychology - Preliminary Studies for Part II of Philosophical Investigations, Vol. 1*, Basil Blackwell, 1982.

PI 『探究』: *Philosophical Investigations*, Blackwell Publishers, 1953. (藤本隆志 訳『哲学探究』, ウィトゲンシュタイン全集 第8巻, 大修館書店, 1976.)

(2) 原文のイタリック体は傍点にて示した。[] は引用者による補足である。

注

- ¹ das Bemerken eines Aspekts. この Bemerken は、「認知」と訳されることが一般的ではあるが、本稿では動詞のニュアンスが重要であるため、erkennen「認識する」との訳し分けという観点から、bemerken は「気づく」で統一した。
- ² ここでは「共通する」と言われているが、アスペクト体験の表明がかならずこのかたちでなければならないというわけではない。これらの表現は、特徴的な諸ケースへの言及と考えたほうが適切だろう。
- ³ 『心理学の哲学1』 § 836 では、「体験」の下位概念として「経験」が位置づけられ、前者には人称間の非対称性、後者には時間の持続が特徴として挙げられている。しかし、ウィトゲンシュタイン自身がどの特徴づけに従っているか、はっきりしない。そのため、「経験する」と「体験する」を本稿では区別せず用いた。
- ⁴ 『最後の草稿』では、文末の表現が「立方体の図をコピーさせるだけでなく、さらに、立方体を示させる」となっている。『探究』の言い回しの方がより正確だと考え、本文ではそれを挙げた。
- ⁵ 本文では『探究』において言及された事例(cf. PI II116)をアレンジしたが、これは、ネッカー図形、すなわち右斜め上から見ているようにも、左斜め下から見ているようにも見ることのできる錯視の図形ともとることができる。その場合でも、コピーに加えて別の説明が必要になるという要点は変わらない。
- ⁶ この節が受けているのは、つぎのような問題提起である。

コピーはわたしの視覚体験の不完全な記述なのか。ちがう。しかし、さらに詳細な規定

をわたしがする必要があるかは、状況次第なのだ。それ [コピー] は不完全であり得る。問いが残っているなら。(例：立方体の図) (LW499, cf. PI II156)

ここから、コピーと視覚体験の関係が俎上に挙げられ、それが、立方体の図の例で検討されていくと考えられる。

- 7 直接的に受けているのは、「対象 (知覚の対象) の体制 (Organisation) に気づく」(LW510) ことであるが、周知のように「体制」はアスペクトの重要な一要素である。本稿では、「体制」の議論には踏み込まないため、混乱をさける目的で、ここでは「アスペクトに気づくこと」とした。
- 8 この構図に、ウィトゲンシュタイン自身、注意を促している。cf. PI II144, 245, LW542.
- 9 ここには、コピー (模写)、スケッチ、記述のあいだの微妙な、しかも漸近的な差がある。(cf. RPP II391)
- 10 この「知覚」は、これまでの考察からわかるように、色や形のコピーで示される、前者の意味での「見る」である。
- 11 これらの点は、『探究』I部の私的言語にまつわる議論へとつながる。
- 12 この問いは、『最後の草稿』では、わずか十節ほどのあいだで3回 (§§638, 642, 646)、執拗に感じるほど繰り返されており、§642ではこれが「概念の問題」であると言われている。これは、原文では *Inwiefern ist es ein Sehen?* である。これを「アスペクトに気づくこと」は、どのていど見ることなのかと解するためには、解決すべき問題が2つある。まず、esが指しているのは「アスペクトに気づくこと」であるのか。これには、それぞれの文脈で指していると推察される事例が異なるということ。また、『探究』、『最後の草稿』 §§638, 646において、この一文のみで独立の一節を与えられていることから、この es は一般性の高い「アスペクトに気づくこと」と解釈できると判断した。つぎに、*inwiefern* には、「どのていど」という程度を尋ねる訳と、「どの点において」「なぜ」といった訳がある。英訳では *in what way* (PI II) や *in what sense, in what respect* (LW) といったように、後者の訳が採用されている。しかし、これが「概念の問題」であり、経験概念においてどのような場所に位置するのかという問題だとすれば、この問いは関連する諸概念と「アスペクトに気づく」ということが、どのくらい近い、あるいは遠いのかを尋ねる問いだと考えた方がよい。この点から、本稿の目的をよりはっきりと示すために「どのていど」という訳語とした。また、全集では「どのていど」が採用されている。
- 13 これを補完する問いとして、アスペクトを見るとき、なにを見ているのかという「対象のカテゴリー」(PI IIxi 111 (p.193)) への問いを立てることができる。これに対する答えとしては、本文でも触れた、内的像や私的対象への否定的なコメント、あるいは、すでによく知られた「体制」や「内的関係」といった考えが考察される。
- 14 以下では「感じる」等との関連にのみ着目するが、この2つの特徴は、先に挙げた動詞のなかにも、たとえば「考える」「想像する」など、あてはまるものもある。
- 15 「ここ」で本文に引用した諸事例を直接的に指しているわけではない。『最後の草稿』では、子どもが箱を家とみなすという事例を受けているが、『探究』ではその文脈からは引き離されている。そのことから、この節をアスペクトのひらめき一般に拡張しても問題ないと判断した。
- 16 引用の直後の節では、花をじっと見ていながら、その色を見ていないというケースが検討されている (cf. PI II242)。ウィトゲンシュタインは、これが有意味になる場合を肯定的に述べているが、それらはどれも花を認識していない、別のことを考えているような場合であり、知覚である「見る」に含めてよいのかは疑問である。

-
- 17 人称間での差は、複数のアスペクトがあることに気づいていない「かれ」に対して、「かれはそれを…として見ている」と、それがアスペクト変化を起こす図形だと知っているわたしは言うことができるが、かれ自身は「それは…だ」というように知覚を報告するというかたちで言及されることもある (cf. PI II121, 135)。これは、「感じとる」といった概念との比較というより、「知る」とのつながりで論じられるべき問題である。そのため、本稿では取りあげていない。
- 18 これは、語感の事例であり、意味体験へと連なる。
- 19 このような「感じ」は、あるメロディーをしかじかに聞くという事例で『探究』では説明される (PI II229-233)。これらは「修正された感覚概念」(PI II231, LW744)とも言われる。
- 20 これは、ひとつの対象を別様に見るというアスペクト体験の中心的な特徴とはややずれるものの、対象のアスペクトにはっと「気づく」という点で、似た体験だと言える。
- 21 その可能性をいくつか挙げておこなうならば、目を閉じれば体験もできなくなる (cf. RPP I1070)、目を使ってなされる (cf. RPP I1102) ことがもっとも基本だが、まずは、アスペクト体験が、あくまで対象の記述が変化することによって表現され、その意味で新しい知覚の表現である点 (cf. 本稿 1.2)。つぎに、アスペクトに対しても、対象に対するのと同様に、ある態度 (*Einstellung*) がとられるという点 (cf. PI II193)。たとえば、箱を家「として見る」ということは、そのなかに入るとき、側面にある「ドア」は使うが、上の「屋根」からは出入りしないといったように、それを「家」として扱う、すなわちそれが「家である」という態度をとり、実際にそう反応する (cf. PI II167) ということである。また、行為ではなく状態だということ (cf. PI II 248-250) も、2つの見るの共通点として言及されている。より踏み込んだ考察は今後の課題としたい。
- 22 これは、内的関係の知覚と関連する。

アスペクトのひらめきにおいて知覚しているのは、対象の性質ではなく、その対象と別の対象との内的関係なのだ。(PI II247, LW516)

本文の例で言えば、今日の前にある三角形だけでなく、ほかのさまざまな三角形、あるいは四角形や円、それらと「頂点」や「底辺」といった概念の関係を知り、それらを使いこなせるようになって、はじめて「わたしは今これを頂点として見る」と言うことができるということだ。それは、色や形といった対象の性質ではなく、別の対象との関係である。

(すがさき・よしの 筑波大学大学院人文社会科学研究所在学中)